

Società Rossiniana Giapponese

日本ロッシーニ協会

歌劇《マオメット 2 世》抜粋

— ピアノ伴奏による楽曲セレクション —



2013 年 10 月 11 日 18 時 30 分開演 紀尾井ホール

主催：日本ロッシーニ協会

後援：イタリア文化会館

後援：公益財団法人 日伊協会

マネージメント：ミリオンコンサート協会

歌劇《マオメット 2 世 (*Maometto secondo*) 》 2 幕のドラマ・ペル・ムジカ

台本 チェーザレ・デッラ・ヴァッレ (Cesare Della Valle, 1777-1860)
原作 デッラ・ヴァッレ自身の未出版の悲劇『アンナ・エリーゾ』(1820 年執筆)
作曲 ジョアキーノ・ロッシーニ (Gioachino Rossini, 1792-1868)
初演 1820 年 12 月 3 日、ナポリ、サン・カルロ劇場

人物 パオロ・エリッソ (テノール) ……ネグロポンテ島を治めるヴェネツィア人の司令官
アンナ (ソプラノ) ……パオロ・エリッソの娘
カルボ (コントラルト) ……ヴェネツィア人の指揮官
コンドゥルミエーロ (テノール) ……指揮官の一人
マオメット 2 世 (バス) ……オスマン・トルコ皇帝
セリモ (テノール) ……マオメット 2 世の友人
他に、ネグロポンテの女、回教徒の戦士、回教徒の娘、ヴェネツィアの兵士、回教徒の兵士たち (合唱)

出演 天羽 明恵 (ソプラノ/アンナ)
家田 紀子 (ソプラノ/アンナ)
富岡 明子 (メゾソプラノ/カルボ)
阪口 直子 (コントラルト/カルボ)
中井 亮一 (テノール/パオロ・エリッソ)
須藤 慎吾 (バリトン/マオメット)
工藤 翔陽 (テノール/コンドゥルミエーロ&セリモ)
日本ロッシーニ協会合唱団 ソプラノ：武部 裕美、高橋千夏 メゾソプラノ：片岡 美里、岩谷 美津子
テノール：中川 誠宏、田山夢人 バス：山下 友輔、小野寺 光
ピアノ 金井 紀子
解説 水谷 彰良

字幕制作 吉田 牧子 (原訳 小瀬村 幸子)
舞台字幕/映像 まくうち

あらすじ早わかり

【第 1 幕】

マオメット率いるオスマン・トルコ軍に包囲されたネグロポンテ島の司令官エリッソは、若き指揮官カルボを支持して徹底抗戦を決意する。エリッソは自分の娘アンナをカルボと結ばせようとするが、アンナはミティレーナ島の領主ウベルトへの愛を告白する。味方の裏切りで城門が開かれたと知ったエリッソは、自害用の短剣をアンナに渡して砦に向かうが、カルボと共にトルコ軍に捕えられる。ウベルトがマオメットその人と知ったアンナは短剣を取り出し、「父とカルボを解放しなければここで死ぬ」と言い、二人は解放される。エリッソは娘がマオメットを愛していたことに怒りを露わにする。

【第 2 幕】

マオメットはあらためてアンナへの愛を告白するが、アンナは拒み、死を選ぶと答える。マオメットは彼女に皇帝の印璽を与え、再び戦いに向かう。教会の地下墓所で父とカルボに再会したアンナは印璽を渡し、母の墓前でカルボと結婚する。父とカルボが戦いに赴き、独りになったアンナはトルコ軍に囲まれ、ヴェネツィア軍の勝利を知る。だが、マオメットから印璽を返すよう迫られたアンナは、自分の夫はカルボであると告げて自害する。



ジェンティーレ・ベッリーニによる
メフメット 2 世の肖像画 (1480 年)

歌劇《マオメット 2 世》抜粋 本日はシェーナの多くをカットし、下記ナンバーを部分的に割愛して演奏します。

【第 1 幕 Atto primo】

- N.1 導入曲〈エリツソよ、あなたの命により集まりました〉
Introduzione: “Al tuo cenno, Erisso, accoltie” 中井亮一 富岡明子
工藤翔陽 男声合唱
- N.2 アンナのカヴァティーナ〈ああ！ 虚しくも悲しげな目に〉
Cavatina Anna: “Ah! che invan sul mesto ciglio” 家田紀子
- N.3 シェーナ〈いいえ、黙っていられません〉とテルツェットーネ〈ああ！ なんと稲妻が〉
Scena: “No, tacer non deggio” e Terzettone: “Ohimè! qual fulmine” 天羽明恵 富岡明子
中井亮一 女声合唱
- N.4 合唱〈剣により、火により〉とマオメットのカヴァティーナ〈皆の者、立ってくれ、かくも良き日に〉
Coro: “Dal ferro, dal foco” e Cavatina Maometto: “Sorgete: in sì bel giorno” 須藤慎吾 男声合唱
- N.5 第 1 幕フィナーレ〈正義の神よ、これはなんという責め苦！〉
Finale Primo: “Giusto Ciel, che strazio è questo!” 家田紀子 阪口直子 中井亮一
須藤慎吾 工藤翔陽 混声合唱

————— 休憩 —————

【第 2 幕 Atto secondo】

- N.6 導入曲〈狂ってますわ、花の盛りの年齢で〉
Introduzione: “È follia sul fior degli anni” 女声合唱
- N.7 アンナとマオメットの二重唱〈アンナ…泣いておるのか？〉
Duetto Anna-Maometto: “Anna...tu piangi?” 天羽明恵 須藤慎吾
- N.8 合唱〈ああ、なぜ時を引き延ばして〉とマオメットのアリア〈勇敢な申し出に〉
Coro: “Ah che più tardi ancor?” e Aria Maometto: “All’ invito generoso” 須藤慎吾 家田紀子
男声合唱
- N.9 シェーナ〈ついてこい、ああ、カルボ〉とカルボのアリア〈心配無用です：卑しい感情に〉
Scena: “Sieguiami, o Calbo” e Aria Calbo: “Non temer: d’un basso affetto” 中井亮一 富岡明子
- N.10 三重唱〈このいまわの時に〉
Scena: “Oh, come al cor soavi” e Terzetto: “In questi estremi istanti” 家田紀子 阪口直子
中井亮一 女声合唱
- N.11 シェーナ〈やっとなすべきことを半分終えました〉
Scena: “Alfin compiuta è la metà dell’opra” 家田紀子 女声合唱
- 第 2 幕フィナーレ〈裏切り女はここだ〉
Finale Secondo: “Ecco la perfida” 天羽明恵 須藤慎吾 混声合唱

ピアノ伴奏 金井紀子

合唱 武部裕美 高橋千夏 片岡美里 岩谷美津子
中川誠宏 田山夢人 山下友輔 小野寺 光

解説 水谷彰良 字幕制作 吉田牧子（原訳 小瀬村幸子） 舞台字幕／映像 まくうち

《マオメット 2 世》抜粋



出演者プロフィール

天羽 明恵 (あもう あきえ ソプラノ) Amou Akie (Soprano)



東京藝術大学卒業。オペラ研修所修了。文化庁派遣芸術家在外研修員としてシュトゥットガルトに留学。95年第6回五島記念文化賞オペラ新人賞受賞。同年8月ソニア・ノルウェー女王記念第3回国際音楽コンクール優勝。ドイツを拠点にヨーロッパ各地の歌劇場や音楽祭に多く出演。日本でも新国立劇場、サントリーホール・ホールオペラなどへ定期的に出演。超絶的なコロラトゥーラとリリックな声が内外で高い評価を得、主要オーケストラの定期公演のソリストとしても出演。1999年度アリオン賞、2003年第14回新日鉄音楽賞フレッシュアーティスト賞受賞。日本ロッシーニ協会運営委員。サントリーホール・オペラアカデミーのコーチング・ファカルティ。

家田 紀子 (いえだ のりこ ソプラノ) Ieda Noriko (Soprano)



東京音楽大学卒業。小澤征爾指揮民音オペラ《スペードの女王》でデビュー。新国立劇場、藤原歌劇団、日本オペラ協会、東京室内歌劇場、日本オペレッタ協会等多くの舞台に出演。《第九》《メサイア》《エリア》《戴冠ミサ》《復活》《一千人の交響曲》等ソリストとしても活躍。《夕鶴》は7回、池辺晋一郎《おしち》は2回のプロデュース主演を行い、2010年「つう」（ローマ、パリ）、2013年3月、日越外交関係樹立40周年記念《夕鶴》（ハノイ）主演等国内外で活躍。2014年3月、日本オペラ協会《春琴抄》春琴で出演予定。藤原歌劇団団員。日本ロッシーニ協会運営委員。CD『永遠に』『宵待草』『歌に生き 恋に生き』をリリース。

富岡 明子 (とみおか あきこ メゾソプラノ) Tomioka Akiko (Mezzosoprano)



東京藝術大学卒業、同大学院修了。在学中に安宅賞受賞。ローマ音楽財団奨学生としてイタリア・パルマ音楽院に学び、審査員全員一致の首席にて学位取得。2011年日本音楽コンクール2位をはじめ、パリッツォーニ国際声楽コンクール2位及び聴衆賞、フラビアーノ・ラポー国際声楽コンクール2位など国内外で受賞を重ねている。《フィガロの結婚》ケルビーノ役を皮切りに、パルマ歌劇場《試金石（抜粋）》やペーザロ・ロッシーニ音楽祭《ランスへの旅》、また小澤征爾音楽塾やサイトウキネンフェスティバルにおいて《セビリヤの理髪師》に出演。2012年東京フィル定期で巨匠アルベルト・ゼッダと共に演じ、高い評価を得た。二期会会員。

阪口 直子 (さかぐち なおこ コントラルト) Sakaguchi Naoko (Contralto)



武蔵野音楽大学卒業。東京藝術大学大学院修了。1984年度文化放送音楽賞受賞。1985年イタリア・シエナのキジアーナ音楽院夏期講習で最優秀賞を受賞。《第九》《メサイア》《クリスマス・オラトリオ》、《エリア》（N響定期、サバリッシュ指揮）、ブラームス《アルト・ラブソディー》、マーラー《交響曲第2番〔復活〕》ほかモーツァルト《レクイエム》《ハ短調ミサ》、ロッシーニ《小ミサ・ソレムニス（小荘厳ミサ）》、ヴェルディ《レクイエム》等のソリストとして活躍。オペラは《オロンテア》《フィガロの結婚》《ランスへの旅》などに出演。アンサンブル「BWV2001」メンバー。日本ロッシーニ協会運営委員。国立音楽大学非常勤講師。

中井 亮一 (なかい りょういち テノール) Nakai Ryoichi (Tenore)



名古屋芸術大学首席卒業、同大学院修了。スカラ座音楽院オペラ研修所修了。'05年より渡伊。スカラ座(合唱)、フェニーチェ歌劇場(「ロッシーニ・ガラコンサート」)、ヴェネツィア国際音楽祭などに出演。'07年ロッシーニ音楽祭若者公演《ランスへの旅》にベルフィオーレ役で出演。'10年藤原歌劇団公演《タンクレーディ》にA.ゼッダ氏の指揮でアルジーリオ役を好演し、'12年新国立劇場での同団公演《夢遊病の女》ではエルヴィーノ役に抜擢された。11/30 愛知県芸術劇場で主演予定の《セヴィリアの理髪師》(園田隆一郎氏指揮)は伯爵の大アリアを含む完全版公演として注目されている。名古屋芸術大学講師。藤原歌劇団団員。日本ロッシーニ協会会員。

須藤 慎吾 (すどう しんご バリトン) Sudo Shingo (baritono)



国立音楽大学卒業、同大学院修了。第37回イタリア声楽コンクールソシエナ大賞受賞、第42回日伊声楽コンクール第1位ならびに歌曲賞受賞、第21回ヴェルゼツィア国際音楽コンクール入選、第10回オルヴィエート国際オペラコンクール第2位。《ドン・ジョヴァンニ》タイトルロールでデビュー。7年間のイタリア留学中にミラーノを中心にイタリア各地の劇場に出演し好評を博す。ヴェルディ・バリトンとして高い評価を受ける。今後は《フィデリオ》《椿姫》《フィガロの結婚》《愛の妙薬》等に出演の他、2014年春に初のソロアリア集CDの発売を予定する。国立音楽大学講師、藤原歌劇団団員。
<http://opera7.jp>



工藤 翔陽 (くどう しょうよう テノール) Kudo Shoyo (Tenore)

鹿児島県立松陽高等学校音楽科卒業。第31、32、33回鹿児島県高等学校音楽コンクール3年連続金賞受賞、同コンクール第33回大会にて最優秀賞受賞。第66回全日本学生音楽コンクール東京大会大学の部入選。ヴェルディ《椿姫》ガストーネ、ブッチーニ《トゥーランドット》ペルシャ王子役で出演の他、ベートーヴェン《交響曲第9番》テノールソロを務める。巻木春男、的場辰朗の各氏に師事。現在、昭和音楽大学4年次在籍。

日本ロッシーニ協会合唱団 ソプラノ：武部 裕美、高橋千夏 メゾソプラノ：片岡 美里、岩谷 美津子
テノール：中川 誠宏、田山夢人 バス：山下 友輔、小野寺 光



金井 紀子 (かない のりこ ピアノ) Kanai Noriko (Piano)

武蔵野音楽大学ピアノ科卒業、同大学専攻科修了。声楽のアンサンブルピアニストとしての実績は長期に及び、オペラの分野ではコレペティートルとして二期会、藤原歌劇団、東京室内歌劇場、東京オペラプロデュース、新国立劇場小劇場などで活躍。1988～89年文化庁芸術家在外研修員としてミラーノのスカラ座に留学し、イタリアのテレビ番組《リリカ・イン・サロット》のレギュラーピアニストを務め、T.ファブリチーニ、M.レアレなどのリサイタル伴奏も務める。日本ロッシーニ協会事務局長。昭和音楽大学名誉教授。



水谷 彰良 (みずたに あきら 解説) Mizutani Akira

1957年 東京生まれ。オペラ研究家。日本ロッシーニ協会会長。フェリス学院大学オープンカレッジ、朝日カルチャーセンター(新宿)講師。著書：『プリマ・ドンナの歴史』(全2巻、東京書籍)、『ロッシーニと料理』(透土社)、『消えたオペラ譜』『サリエリ モーツァルトに消された宮廷楽長』『イタリア・オペラ史』(共に音楽之友社)。共著：『魅惑のオペラ』(小学館。全30巻)ほか多数。『サリエリ』で第27回マルコ・ポーロ賞を受賞。多数の論文・論考を日本ロッシーニ協会ホームページに掲載。
<http://societarossiniana.jp/>

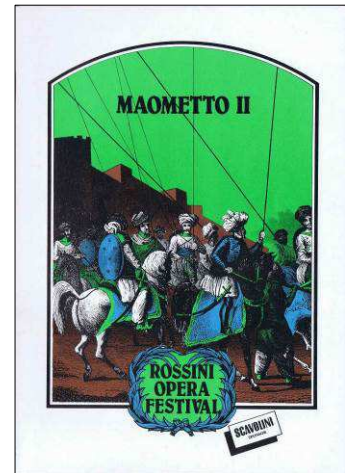
マオメット 2 世 (*Maometto secondo*)

2 幕のドラマ・ペル・ムジカ

台本 チェーザレ・デッラ・ヴァッレ (Cesare Della Valle,1777-1860)
原作 デッラ・ヴァッレ自身の未出版の悲劇『アンナ・エリーゾ』 (1820 年執筆)
作曲 ジョアキーノ・ロッシーニ (Gioachino Rossini,1792-1868)
初演 1820 年 12 月 3 日、ナポリ、サン・カルロ劇場

人物 パオロ・エリッソ (テノール) ……ネグロポンテ島を治める
ヴェネツィア人の司令官
アンナ (ソプラノ) ……パオロ・エリッソの娘
カルボ (コントラルト) ……ヴェネツィア人の指揮官
コンドウルミエーロ (テノール) ……指揮官の一人
マオメット 2 世 (バス) ……オスマン・トルコ皇帝
セリモ (テノール) ……マオメット 2 世の友人

他に、ネグロポンテの女、回教徒の戦士、回教徒の娘、
ヴェネツィアの兵士、回教徒の兵士たち (以上、合唱)



1985 年の復活上演プログラム

楽曲構成

第 1 幕

- N.1 導入曲〈エリッソよ、あなたの命により集まりました〉 (エリッソ、コンドウルミエーロ、カルボ、合唱)
— 導入曲の後のレチタティーヴォ (エリッソ、カルボ)
- N.2 アンナのカヴァティーナ〈ああ！ 虚しくも悲しげな目に〉 (アンナ)
— カヴァティーナの後のレチタティーヴォ (アンナ、エリッソ、カルボ)
- N.3 シェーナとテルツェットーネ〈ああ！ なんという稲妻が〉 (アンナ、カルボ、エリッソ、合唱)
- N.4 合唱とマオメットのカヴァティーナ〈皆の者、立ってくれ、かくも良き日に〉 (マオメット、合唱)
- N.5 シェーナと第 1 幕フィナーレ〈正義の神よ、これはなんという責め苦！〉 (アンナ、カルボ、エリッソ、セリモ、マオメット、合唱)

第 2 幕

- N.6 導入曲〈狂ってますわ、花の盛りの年齢で〉 (合唱)
- N.7 シェーナ、アンナとマオメットの二重唱〈アンナ…泣いておるのか？〉 (アンナ、マオメット)
- N.8 シェーナとマオメットのアリア〈勇敢な申し出に〉 (マオメット、セリモ、アンナ、合唱)
- N.9 シェーナとカルボのアリア〈心配無用です：卑しい感情に〉 (カルボ、エリッソ)
- N.10 シェーナと三重唱〈このいまわの時に〉 (アンナ、カルボ、エリッソ)
- N.11 シェーナと第 2 幕フィナーレ〈不幸なお方！ あなたに残されたのは逃げることだけ〉 (アンナ、マオメット、合唱)

物語 [時の指定なし（史実では1470年7月）。場所はネグロポンテ]

【第1幕】

マオメット 2 世率いるオスマン・トルコ軍に包囲されたネグロポンテ島の宮殿。マオメットから明日までに開城せよと最後通牒を付きつけられたヴェネツィア軍の司令官パオロ・エリッソが、指揮官を集めて戦略会議を開く。その一人コンドゥルミエーロは降伏を提案するが、徹底抗戦を主張するカルボに他の指揮官も同調し、明日は最後まで戦おうと全員で誓う（N.1 導入曲）。会議が終わり、エリッソはカルボを娘アンナの部屋に誘う。

アンナが自室で不安にかられていると（N.2 アンナのカヴァティーナ）、エリッソがカルボを連れて現れ、カルボがアンナを妻に望んでいると話す。その言葉にショックを受けたアンナが、かつてコリントスで出会ったミティレーネの領主ウベルトへの愛を告白すると、エリッソは、ウベルトは自分と一緒に船にいたので偽者だ、と非難する。思いがけぬ話に 3 人で驚いていると大砲の音と叫び声が聞こえ、アンナは教会に走り去る。教会前の広場では女たちが恐怖に震えている。そこに来たアンナは裏切り者が城門を開いたと知り、跪いて神に慈悲を請う。エリッソとカルボが駆けつけ、夜明けに敵軍が攻め込むので教会に隠れるよう促す。エリッソはアンナに自害用の短剣を渡し、女たちは兵士の夫と別れを悲しむ（以上、N.3 シェーナとテルツェットーネ）。

乱入したトルコ軍がヴェネツィア兵を追走するとマオメットが現れ、回教徒の兵士たちを前に世界征服を宣言する（N.4 合唱とマオメットのカヴァティーナ）。マオメットは忠臣セリモに追撃を指示し、かつてギリシアを視察したと話す。そこに兵士たちから「敵の司令官を捕らえた」との報せが届く。エリッソとカルボが連れて来られ、エリッソの名を聞いたマオメットは「かつてコリントスの司令官だったか?」「娘はいるか?」と問い質し、要塞を明け渡せば全員の命を助けると提案する。だがエリッソとカルボは拒否し、怒ったマオメットは兵士に二人の拷問を命じる。そこに教会からアンナと女たちが駆け込んでくる。マオメットとアンナは互いに気づき、アンナの発した「ウベルト!」に一同驚く。アンナはとっさにカルボを兄と偽って短剣を取り出し、「父と兄を解放しなければここで死ぬ」と迫る。マオメットは 2 人の鎖を解き、アンナに妃となって自分と暮らすよう求める。その言葉に心を乱すアンナを見て、全員が驚き戸惑う（以上、N.5 シェーナと第 1 幕フィナーレ）。

【第2幕】

マオメットの贅沢な天幕の中。回教徒の侍女たちがアンナに高価な贈り物を差し出し、恋に心を閉ざさぬよう説く（N.6 導入曲）。侍女たちを黙らせたアンナが逃げ道を探していると、マオメットが現れる。マオメットはアンナに求愛し、私と結婚してイタリアの女王になれば父や兄とも一緒に暮らせる、と説く。アンナは彼への愛を認めながらも、「天と父の意に反するよりも死を選びます」と答える（N.7 シェーナ、アンナとマオメットの二重唱）。遠くから騒ぎが聞こえ、天蓋が開いて広場にあふれる兵士たちを見たマオメットは、アンナに彼女の父と兄の安全を保証し、その証しに皇帝の印璽を与える。そして兵士たちを鼓舞し、高らかに出陣を宣言する（N.8 シェーナとマオメットのアリア）。

教会の地下墓所。エリッソがカルボを地下に導き、妻の墓に話しかける。アンナを罪深い娘と嘆くエリッソにカルボは、「彼女は自分の身の安全のために卑劣な愛を選んだりはしません」と言って励ます（N.9 シェーナとカルボのアリア）。そこにアンナが現れ、マオメットの印璽を渡して死の覚悟を伝え、母の墓前でカルボと結婚の契りを結ぶ。苦悩する 3 人は「次に会う時は…天国で」と約束して別れる（N.10 シェーナと三重唱）。

独り残ったアンナは、「あとは自分が生贄になるだけ」と死を覚悟する。そして祈りを終えた女たちと墓所で合流し、ヴェネツィア軍の勝利を知って喜ぶが、なお死を甘受しようと決意する。そこにトルコ軍の兵士たちが乱入し、「私を切りなさい」と胸を差し出すアンナの気高い姿にたじろいでいると、マオメットが現れる。印璽の返還を求めるマオメットにカルボとの結婚を告げたアンナは、「母の遺灰が私の血を拾います」と言って短剣を胸に突き刺し、息絶える。その光景に一同愕然として立ちすくむ（N.11 シェーナと第 2 幕フィナーレ）。

[水谷彰良]

【作品の成立】

1819 年 12 月 26 日にミラーノのスカラ座で《ピアンカとファッリエーロ》を初演したロッシーニは、翌 1820 年 1 月に活動拠点のナポリに帰還し、サン・カルロ劇場の音楽監督を務めるかたわら《グローリア・ミサ》を作曲した（3 月 24 日ナポリのサン・フェルディナント教会初演）。その頃にはルッカのジューリオ劇場からも新作オペラを求められ、5 月 25 日にはロッシーニが台本を受け取ったことを仄めかす記事が『両シチーリア新聞』に掲載されたが、これが《マオメット 2 世》の台本かどうかは不明である。

《マオメット 2 世 (*Maometto secondo*)》の台本は、ナポリの王立諸劇場の経営陣の一人でもあった劇作家ヴェンティニャーノ公爵チェーザレ・デッラ・ヴァッレが、未出版の自作の劇『アンナ・エリーゾ (*Anna Erizo*)』をロッシーニの求めでオペラ用に改作したものである。主人公マオメット 2 世は史実のオスマン帝国第七代スルタン、メフメト 2 世 (*Mehmet II, 1432-81* [在位 1444-46, 51-81]) で、1453 年にコンスタンティノープルを攻略して東ローマ帝国を滅ぼすとその後も遠征を重ね、1462 年にはヴェネツィア共和国領レスボス島を占領、同じくヴェネツィア領のネグロポンテ島（ギリシアのエウボイア島）を 1470 年に占領してオスマン帝国に組み入れた。『アンナ・エリーゾ』は 1470 年 6 月下旬～7 月のネグロポンテ攻略（とりわけ落城直前の 7 月 11 日からメフメト 2 世が入城する 14 日まで）の史実を基に、メフメト 2 世 [マオメット 2 世] 以外の人物もその原型が実在する。但しマオメットとアンナの恋、カルボとアンナの結婚などの筋立てはフィクションである。



1820 年のロッシーニ

ロッシーニはデッラ・ヴァッレの草稿に魅せられて台本化を依頼したが、両者がナポリ在住のため書簡のやりとりがなく、完成台本がいつロッシーニに渡されたかなどを詳らかにするドキュメントは残されていない。当初《マオメット 2 世》の初演は 1820 年 9 月に予定されたが、7 月に炭焼き党が蜂起してナポリの政治状況が流動的になったため見送られた。ロッシーニは 10 月 17 日付の母宛の手紙に「ぼくのオペラ《マオメット (*Maometto* [sic])》[の作曲] をすでに終えました。他の作品よりも悪くないのを期待します」と記し、11 月 7 日に送ったと推測される手紙には「ぼくは 6 日後に上演されるオペラ《マオメット》[の作曲] を終えました」と書いた。けれども劇場委員会が望んだに 11 月 19 日に間に合わず、2 週間後の 12 月 3 日にサン・カルロ劇場で初演を迎えることになった。

【特色、楽曲と聴きどころ】

ロッシーニ 31 作目の歌劇《マオメット 2 世》はナポリで行ったオペラ・セーリア改革の頂点をなす名作で、ドラマと音楽の連続性において《オテッロ》や《エルミオーネ》を凌ぐ。序曲を持たない作劇や大規模な楽曲に劇を集約する手法は《エジプトのモゼ》以後の改革の一つであり、後述するように第 1 幕のテルツェットーネ（大三重唱）、第 2 幕フィナーレにおける劇と音楽の柔軟な構成にその革新性が表れている。

第 1 幕の第 1 曲：導入曲（エリッソよ、あなたの命により集まりました）はマオメットの軍勢に包囲された絶体絶命の状況で始まり、エリッソのレチタティーヴォを受けて指揮官たちの歌う力強い旋律（「あなたに最初に答えるのは」）が他の人物によって繰り返され強い印象を与える。締め括りの合唱（そうだ、誓おう！イタリアの剣にかけて誓おう）は悲壮感を漂わせた音楽で、その愛国調によりヴェルディを先取りする。

完全な舞台転換を経ての第 2 曲：アンナのカヴァティーナ（ああ！虚しくも悲しげな目に）は、父と恋人を気づかって苦しむ胸の内が巧みに音楽化され、木管楽器のソロと弦楽器のピッツィカートによる伴奏と歌が対話するかのよう進行する。シェーナを挟んでの第 3 曲：テルツェットーネ [大三重唱]（ああ、なんという稲妻が）は 25 分に及ぶ長さのみならず、曲中で舞台転換を行う破格の構成……三重唱はアンナの自室に

おけるアンナ、エリッソ、カルボの驚きで始まり、大砲の音を聞いたエリッソとカルボが退出すると舞台がネグロポンテの広場に変わる……によっても異例である。そして女たちの合唱〈なんて不幸な！〉を受けてアンナの祈り〈正義の神よ、このような危機にあつて〉が精妙な弦楽合奏とハーブの伴奏で感動的に歌われ、小太鼓の音で登場したエリッソとのシェーナを挟んで三重唱〈娘よ…止めるな。急がねば〉に移行する。この三重唱はテルツェットーネのカバレッタに相当するが、全体が劇の推移に沿った柔軟な構造を持ち、カバレッタであると同時に拡大形式による一個の三重唱曲となっている。

この三重唱はホ長調で終わらず、後奏の間にト長調に移行してマオメット登場のナンバーとなる。**第4曲：合唱〈剣により、火により〉とマオメットのカヴァティーナ〈皆の者、立ってくれ、かくも良き日に〉**は、バンダ・トゥルカ〔トルコ風バンダ〕を伴うエキゾチックなハ短調の序奏と回教徒の合唱に始まり、続いて登場したマオメットが平伏する兵士たちを前に世界征服を宣言するもので、その力強く凛とした音楽は初演歌手フィリッポ・ガッリ（Filippo Galli, 1783-1853）の壮麗な声と技巧を前提にしている。

シェーナを挟んでの**第5曲：第1幕フィナーレ〈正義の神よ、これはなんという責め苦！〉**はテルツェットーネ同様ドラマの流れに沿った柔軟な構造を備え、冒頭の三重唱でカルボとエリッソが旋律と音型を共有し、対立するマオメットとの違いが浮き彫りになる。マオメットが「衛兵たち、さあ、奴らを引っ立てよ」と命じてアンナが止めに入るところで劇的的局面が変わり、アンナの嘆願に始まるカノン風四重唱で雰囲気が一変する。そしてアレグロに転じてアンナが父とカルボの解放を要求するフィナーレ後半部は、2/2拍子のギャロップ調のカバレッタで4人のソリストが華麗な技巧を駆使し、クレシェンドを交えてクライマックスを形成する。

第2幕は、回教徒の侍女たちがアンナを懐柔する女声合唱で始まる（**第6曲：導入曲〈狂ってますわ、花の盛り**の年齢で））。それを拒むアンナの前にマオメットが来て愛を告白する**第7曲：二重唱〈アンナ…泣いておるのか？〉**は開始部で二人が同じ旋律を歌い継いで愛情の共有を示唆し、アンナが苦しい胸の内を吐露する叙情的な中間部に転じ、経過部を挟んで技巧的なカバレッタで閉じられる。これに対し、続く**第8曲：マオメットのアリア〈勇敢な申し出に〉**はドラマに沿った柔軟な構成を持ち、出陣を宣言するマオメットに通常のカバレッタを与えず、軍隊行進曲に乗せた男声合唱にマオメットとアンナを絡めて終結部とする。

そして舞台が教会の地下墓所になり、悲しげなクラリネットの前奏に導かれてエリッソとカルボが現れる。エリッソを励ます**第9曲：カルボのアリア〈心配無用です：卑しい感情に〉**はカンタービレ〜カバレッタの定型を用い、2オクターヴを超える広い音域（g#-h）と華麗なテクニックを駆使して歌われる（初演歌手アデライデ・コメリ Adelaide Comelli, 1794-1874.は卓越した技巧を備えたフランス人コントラルト。本名 Adèle Chaumel）。

地下墓所で再会したアンナ、カルボ、エリッソによる**第10曲：三重唱〈このいまわの時に〉**は、死を覚悟した3人の悲壮な思いがカノンを用いて切々と歌われるが、その末尾は劇の展開に即して不意に絶たれ、女たちの祈りの合唱を交えたアンナのシェーナを挟んで**第11曲：第2幕フィナーレ**となる。これは実質的にアンナのアリア・フィナーレと理解しうが、ドラマに沿って柔軟かつ複雑な構成を持ち、祈りのシェーナから間断なく続く前半部は女声合唱〈不幸なお方！あなたに残されたのは逃げることだけ〉〜レチタティーヴォ〜女声合唱を伴うアンナのアリア〈近づく死は〉から成る。後半部は回教徒の兵士たちの合唱〈無駄だ、裏切り女〉に始まり、アンナが決然として「刺しなさい」と言い放つ部分から実質的にアンナの二つ目のアリアとなる。これは超絶技巧のアジリタを駆使する開始部、叙情旋律に豊かな装飾を織り込む〈お母さま、天国のあなたに〉を経てマオメットの登場でいっきにドラマが加速し、アンナの自害を頂点に彼女の死を悼む合唱で締め括られる。

アンナ役はサン・カルロ劇場の絶対的なプリマ・ドンナ、イザベッラ・コルブラン（Isabella Colbran, 1784-



マオメットのカヴァティーナの印刷楽譜
（カルリ社、パリ、1826-27年）

1845)のために作曲されたが、当時喉の不調に苦しむ彼女には歌い切れぬほどの過激な歌唱技巧を求め、僅か9回で上演を打ち切られる一因となっている。なお、エリッソ役の初演歌手アンドレア・ノッツァーリ (Andrea Nozzari, 1775-1832) はロッシーニのナポリ時代の最も重要なテノールであるが、この作品では一つのアリアも与えられていない。

【アンナの自死と《マオメット2世》の歴史的意義】

フィナーレ幕切れに舞台上でヒロインを自死させた点も異例中の異例と言える。ロッシーニは《オテッロ》(1816年)においてオテッロがデズデーモナを舞台上で刺殺し、最後にみずから命を絶つ悲劇的結末を採用したが、大罪である自殺をオペラで描くことは当然のことながら劇場検閲に抵触し、《オテッロ》も《マオメット2世》も他の都市の再演ではヒロインの死のないハッピーエンド改作を余儀なくされた。デズデーモナ殺害とオテッロの自殺に関してはオテッロを異教徒＝野蛮人とする弁明も成り立つが、キリスト教徒のアンナはそうではない。では、なぜアンナの自死は《マオメット2世》で許されたのだろうか。

デッラ・ヴァッレのオリジナル台本では、胸を刺したアンナが母の墓にもたれて最後の台詞(「そして、イタリアを…征服すると…うぬぼれた…あなたは、いま教わるのです…一人のイタリア娘から。祖国がまだあの英雄たちのものであると」)を語り、死んで墓の足元に倒れる運びになっていたのに対し、ロッシーニの総譜では設定と歌詞を変えてアンナがマオメットに母の墓を示し、「母の遺灰の上で、私は彼[カルボ]に手を差し伸べました。母の遺灰が私の血を拾います」と言って胸を刺し、周囲の驚きと痛ましい合唱で劇を閉じるよう変更されている。その結果、アンナが父から与えられた短剣で自害して父との約束や市民としての義務を果たすだけでなく、みずからの意思で亡き母への約束(アンナが母の墓前で無言のうちにマオメットへの罪深い愛を消すためにみずから命を絶って母のもとに行くことと誓ったことは、その後の歌詞で明らかになる)を果たすことで、より高貴なヒロインに高められているのだ。それゆえ異教徒のマオメットを拒否し、祖国と義務に殉じたキリスト教徒の気高い行為としてこれが認められた可能性もあるが、印刷台本と実際の上演の関係も含めて当時のナポリの劇場検閲の研究なしには答えの出せない問題である。

その後ロッシーニはローマ初演の《マティルデ・ディ・シャブラン》(1821年)、ナポリ初演の《ゼルミーラ》(1822年)、ヴェネツィア初演の《セミラーミデ》(1823年)をもつてのイタリアでの活動に終止符を打つ。古典的構成に戻った《セミラーミデ》を別にすれば、《マオメット2世》は《ゼルミーラ》と共に改革的オペラ・セーリアの最後に位置し、その特色はフィリップ・ゴセットが明確に述べているように、主題の変形を用いての劇と音楽の統一性(とりわけ導入曲)、ドラマの連続性を保持する大規模な楽曲構成の確立(とりわけテルツェットネ)、ロンドや定型的カバレッタの形式をしりぞけた自由な展開などの柔軟な構造にある。

最後に、本作の意義に関するゴセットの文章を引用しておこう——「ロッシーニのオペラ・セーリアの最高の業績の一つである《マオメット2世》に、私たちは心に直接的に訴えかける音楽と輝かしい声楽と同時に、音楽とドラマの構造への熟慮と深い理解に対する卓越した才能を見出す。その改訂版《コリントスの包囲》よりも遙かに統一性のとれたこのオペラは19世紀イタリア・オペラの鍵となる作品であり、彼が数年後にイタリア・オペラ作曲家としてのキャリアを終えなければさらに追求したであろう方向性の明確なヴィジョンを私たちに与える作品である」(CD, Philips 412 148-2のライナーノーツ p.11.)。

【上演史】

1820年12月3日ナポリのサン・カルロ劇場で行われた初演は『両シチーリア新聞』の批評(12月6日付)で絶賛されたが、コルブランの喉の不調のため9回で打ち切られた。ロッシーニは最初の再演となるヴェネツィアのフェニーチェ劇場1823年謝肉祭(1822年12月26日初日)のために大幅な改作を施した。主な変更は、序曲(シンフォニア)の追加、アンナのカヴァティーナ(N.2)の削除、アンナ、カルボ、エリッソの三重唱(N.10)のカルボ、エリッソ、マオメットの新たな三重唱への差し替え、《湖の女》のロンド・フィナーレを改作転用してのハッピーエンド採用であるが、音楽とドラマの双方で初演版の革新性は失われてしまった。

その後ロッシーニの関与しない再演が1823年にヴィーン(ドイツ語版)、1824年にミラーノのスカラ座で

行われたが、パリに活動の場を移したロッシーニがフランス語のトラジェディ・リリックに改作した《コリントスの包囲 (*Le siège de Corinthe*) 》を 1826 年 10 月 9 日にパリのオペラ座 [王立音楽アカデミー劇場] で初演し、その各国語版が流布したため、オリジナルの《マオメット 2 世》は 1827 年 7 月のバルセロナ上演を最後に 150 年以上も忘れられることになった。

復活上演は 1985 年 8 月 19 日にペーザロのロッシーニ・オペラ・フェスティヴァル (ROF) で行われ、1993 年 8 月と 2008 年 8 月にも上演された。日本初演は同フェスティヴァル来日公演として 2008 年 11 月 15 日に大津・びわ湖ホールでなされた (ミヒヤエル・ハンベ演出、アルベルト・ゼッダ指揮。マオメット: ロレンツォ・レガッツォ。一連の上演はクラウディオ・シモーネによる批判校訂版の第一次校訂譜を使用)。1822 年ヴェネツィア改訂版の蘇演も 2002 年 7 月 17 日に「ヴィルトバートのロッシーニ」音楽祭で行われた。近年の重要公演に 2012 年 7-8 月ニューメキシコのサンタ・フェ・オペラがあり、Hans Schellevis の新批判校訂版が初使用されている。

付記: 本稿は、日本ロッシーニ協会ホームページ掲載の拙稿「《マオメット 2 世》作品解説」を演奏会プログラム用に縮約したものです。詳細解説は HP をご覧ください。 <http://societarossiniana.jp/>

日本ロッシーニ協会について

日本ロッシーニ協会 (Società Rossiniana Giapponese) は、ロッシーニとその作品の世界的規模の再評価、研究の飛躍的発展に鑑み、これを学問的に継承し、日本における研究・批評・著述・演奏にさまざまな角度から貢献することを目的に設立されました (1995 年 12 月)。名誉会長に 19 世紀イタリア・オペラの文献学的批判考証の世界的権威フィリップ・ゴセット教授 (ロッシーニ全集及びヴェルディ全集編纂最高責任者) を迎え、研究者と演奏家の相互協力、諸団体との交流を通じてロッシーニ復興の一翼を担うべく活動を続けております。

【主な活動と事業】

研究紀要《ロッシニアーナ》発行 (既刊 33 号)

会報《ロッシーニ通信》発行 (随時)

定期演奏会開催 (年 1 回)

例会の開催 (年数回)

協会公式ホームページ <http://societarossiniana.jp/>

後援 (ロッシーニ普及に寄与すると認められる上演、演奏会、イベントへの後援と協力)

国際協力 (海外の団体・研究者との交流、資料と情報の提供)

【組織】

名誉会長: フィリップ・ゴセット (Philip Gossett)

顧問: 高崎保男

会長: 水谷彰良

事務局長: 金井紀子

運営委員: 朝岡聡、天羽明恵、家田紀子、小畑恒夫、小山陽二郎、阪口直子、千代田晶弘、村上光一
(以上 50 音順) + 前記役員

会員: 一般会員及び本協会の活動を後援する個人/団体の特別会員

連絡先: 日本ロッシーニ協会事務局 158-0085 東京都 世田谷区 玉川田園調布 1-11-11-102

TEL 03-3721-2084 FAX 03-3722-0426 e-mail akira642@mb.infoweb.ne.jp

会員随時募集中 (ロッシーニに関心のある方はどなたでも入会できます)

年会費: 一般会員 1 万円 特別会員 3 万円

入会資料は上記事務局まで、ファクスまたはメールでお願いいたします。



日本ロッシーニ協会
Società Rossiniana Giapponese